国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34

ガラス使用

858-34

志れて葉来席
おさまれ時は春風民やもてんをのしき
難波乃芦れよしかしも紀まへうたまや
うらまゝ書とりてあはひ奇とも讀めるを
愛に古き奇物語古事なんとあけめるを
あて書林何かし梓まちりもぬ是に題号せよ
となりしかりしらうに何と称く難かり

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

序

やさしく若くなれども志のく葉草と題し
て筆をそめるものなりし

干時寛永乙戌子 孟春月

洛下源士
玉山雲庵

志のく葉草目録

上巻

一 奇のおこりの事
二 雛波津の事
三 浅香山乃事
四 黄惑星乃事
五 八幡文和氣清麿に賜事
六 菅相巫法の事
七 遍照と小町と歌詠ならせ事
八 熊周の事
九 西行伊勢にて歌よむ事
十 住よしの法の事
十一 住吉明神奥合せる歌賜事
十二 熊師猪現法の事
十三 熱田大明神法の事
十四 石清水法の事
十五 恵心得知の事
十六 古歌を吟ずるは詠ならぬ事

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

十七源牧宮ゟ御事
十八道風ゟ狐ゟ事
十九小野ゟ小野ゟ事
廿天人ゟ文ゟ事
廿一漢朝天皇ゟ御神ゟ事
廿二仲哀ゟ御事
廿三応神ゟ御事
廿四仁徳ゟ御事
廿五履中ゟ御事
廿六反正ゟ御事
廿七允恭ゟ御事
廿八安康ゟ御事
廿九雄略ゟ御事
三十清寧ゟ御事
卅顕宗ゟ御事
卅一仁賢ゟ御事
卅二武烈ゟ御事
卅三継体ゟ御事
卅四安閑ゟ御事
卅五宣化ゟ御事
卅六欽明ゟ御事
卅七敏達ゟ御事
卅八用明ゟ御事
卅九崇峻ゟ御事
四十推古ゟ御事
四十一舒明ゟ御事
四十二皇極ゟ御事
四十三孝徳ゟ御事
四十四斉明ゟ御事
四十五天智ゟ御事
四十六弘文ゟ御事
四十七天武ゟ御事
四十八持統ゟ御事
四十九文武ゟ御事
五十元明ゟ御事
五十一元正ゟ御事
五十二聖武ゟ御事
五十三孝謙ゟ御事
五十四淳仁ゟ御事
五十五称徳ゟ御事
五十六光仁ゟ御事
五十七桓武ゟ御事
五十八平城ゟ御事
五十九嵯峨ゟ御事
六十淳和ゟ御事
六十一仁明ゟ御事
六十二文徳ゟ御事
六十三清和ゟ御事
六十四陽成ゟ御事
六十五光孝ゟ御事
六十六宇多ゟ御事
六十七醍醐ゟ御事
六十八朱雀ゟ御事
六十九村上ゟ御事
七十冷泉ゟ御事
七十一円融ゟ御事
七十二花山ゟ御事
七十三一条ゟ御事
七十四三条ゟ御事
七十五後一条ゟ御事
七十六後朱雀ゟ御事
七十七後冷泉ゟ御事
七十八後三条ゟ御事
七十九白河ゟ御事
八十堀河ゟ御事
八十一鳥羽ゟ御事
八十二崇徳ゟ御事
八十三近衛ゟ御事
八十四後白河ゟ御事
八十五二条ゟ御事
八十六六条ゟ御事
八十七高倉ゟ御事
八十八安徳ゟ御事
八十九後鳥羽ゟ御事
九十土御門ゟ御事
九十一順徳ゟ御事
九十二仲恭ゟ御事
九十三後堀河ゟ御事
九十四四条ゟ御事
九十五後嵯峨ゟ御事
九十六後深草ゟ御事
九十七亀山ゟ御事
九十八後宇多ゟ御事
九十九伏見ゟ御事
百後二条ゟ御事
百一花園ゟ御事
百二後醍醐ゟ御事
百三光厳ゟ御事
百四後光厳ゟ御事
百五後円融ゟ御事
百六後小松ゟ御事
百七称光ゟ御事
百八後花園ゟ御事
百九後土御門ゟ御事
百十後柏原ゟ御事
百十一後奈良ゟ御事
百十二正親町ゟ御事
百十三後陽成ゟ御事
百十四後水尾ゟ御事
百十五明正ゟ御事
百十六後光明ゟ御事
百十七後西ゟ御事
百十八霊元ゟ御事
百十九東山ゟ御事
百廿中御門ゟ御事
百廿一桜町ゟ御事
百廿二桃園ゟ御事
百廿三後桜町ゟ御事
百廿四後桃園ゟ御事
百廿五光格ゟ御事
百廿六仁孝ゟ御事
百廿七今上ゟ御事

中巻

一小野妹子ゟ事
二正月七日七種ゟ事
三七夕まつり始ゟ事
四七ふくめくり初ゟ事
五猿の薬ゟり時ゟ事
六仲哀天皇筑紫ゟ御事
七十月皇后追福ゟ事
八菅原道真公ゟ御事
九女ゟ人形遣ゟり初ゟ事
十仲哀天皇御ゟ時ゟ事
十一うめひじゝ女ゟ事
十二狛犬ゟ事
十三猪目ゟ事
十四山ゟ神ゟ御ゟ事
十五七月の祓ゟ事
十六かゝを祓ゟ御ゟ事
十七うそかりの事

下巻

一神ゟ月ゟ事
二暁の鴫ゟ祓ゟ事
三蟬通ゟ神ゟ事
四蚊ゟ義巻死ゟ事
五大江匡房ゟ御ゟ事
六村雨ゟ御ゟ事

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

七 名月の事
八 さぐちやうの事
九 物語に意を行ふ事
十 三月三日の事の後乃事
十一 菊のさせりて事
十二 宇治橋姫の事
十三 麁屋の七夜に明せいそかす
十四 後鳥羽院御奇乃事
十五 徹書記りて乃事

已上

三代集草巻上

㊀ 奇のおとり乃事

むかし此国いまだなりし時天神七代まあらりて伊弉諾
尊伊弉冊尊とし夫婦の御神天浮橋のよりまして御
下ふ豊国なりしんやとて天瓊矛を以て塗溟をかきさぐり給
むしにその矛のさきにて凝て一川の嶋となる先を磤馭盧嶋
といへり二神彼嶋にくだり給ひ為夫婦して洲国をうみ
むとて便をのころ嶋をめくるの中にみとしらとしてまれめ
くりあふて陰神先にあへるあらしきとく
喜哉遇可美少男

陽神の次にとなへくのことまちく

喜哉遇可美少女

かくとなへさせ給まふ見えこれおとりなりとしるふ面いまことあら
ぢ給ぐ淡のことくなり給ふ故に二神淤能碁呂島にくだりたまふ天神
ことよさつり給ひて天神よ此ありさ国をうつくしかるふ天神ぬと
まふとしへたとのをいくト合をひをしへてのこ淤能の胡
脫はされ給ひゆへなりあらたあ見へしとの給ふこれなりあり
給ふ又ことの給ふことり給ひて此度は陽神先とあへ淤能と淤能と
なへ給ふ見より大八島其芸系の中津島 日本の熟名也 を本来天照大神
蛭子素盞嗚尊月讀尊もしまれ給ひ三川菜本ものでこらくく

出させりされたることといふ前はりしらつぬしらふ胡を中略してよ
ませ給ふものと見は天神此淤能と此神よりてハ素盞嗚
尊お雲雨よりあひ稲田姫をえ給ひ夫婦すと給ふ人て
とのづくりし給ふ時その所ハ八いろ此事のあらなれハ
八雲なりいつも八重垣ぬこめり
屋へよ此淤能ろろその八重垣
これ所一字の字此おとりなく人の作なりてさらんなりき

三 那波津此年の事

此徳天皇いまことみとふおとし給し時淤文殿神天皇崇淤
なりて故淤としかしあるひは淤能をゆつりめひ給く給よ

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34

ガラス使用

を清らんとて
ゐり紀伊のわりてこれはをかりて何
たゞれうまやいゐさもひふかり
かくよさせなひくれ恨をしとも緣にえこうに聖王にあ
まさらせ給ふされも左絶も八十七年なりしと
㊂淺香山の事
聖武天皇の清時うづらきれぬかきことをみちおくの國の守に
なりて下し給ひ守るに國乃司のうけことをそうなりとて
すさ淵しきかたちゐくいかり給へも清法にさふらむし
宗女と以て女清うけしを指おく清酒をすゝめく

何さうぶうなさへこゐれやすれ升ぬ
あさくは人をおもふりのうは
此守まておもさみのんうちとけあうりになり給ひ國を
もおさゑ給ひしとさるにより雖波津のことの
うしと給ひ守の父母なりとてくるゝ人のうしゑ先にかし
守るとなん
㊃黄蔵星と八鳴とが守れる
聖徳太子の清時津の國雖波津は土師連八鳴とふりの
まこうづら守を作りうたゆるせよすれゐりも給ひかく
八鳴が彩のよりまゐりて守うたゆるものあり八鳴あやしとて同の

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34　　ガラス使用

㊇八幡文和氣清麿に託宣の法師の事

考謙天皇とりせしは女帝にくまたらせ給ふ道鏡法師と
いふものをうきりなりく寵愛せさせ給ひ太政大臣の官をさづ
を給ふ人なりけるやましまして是はは太上法皇にあらはふ
道鏡をどりに長じて王位をはげんとおもひてある時養しなりは
氣味の秋夏見えしく宇佐八幡文にかたらふに氣現して告ての
るまとく汝王位をはぐ面しまうしぐ面やまとく民さうへんやこと
いうぎ讓位はしませとうかをう天皇作をうは王位の事ぞうり
はまう意にまうせがたしまうしバ宇佐へ勅使をて其の神勅を
うけひ給ふんとて和氣清麿を勅使としてまゐ宇佐へ法らは

さるに時に道鏡きよくろくに奉しながら清麿をちうつけていそ
く汝一生の大事なるへしかまへくおんぼて勅答とりせと大
の眼をいらしきさうことにふらんでかをう清麿ゐに正しく謀
計といふものゐれともさらぬ神にて退おしゝ宇佐にさううて
ゐるはいまありしなる事にあらざる天皇一麿の神的かくのことを
きのまをうをおうんやとぶんきしあらう勅使なれと得
給ふし我かをうるに御度れテ知らひしきて物なる御愛に
ちまり承じてのこまりて

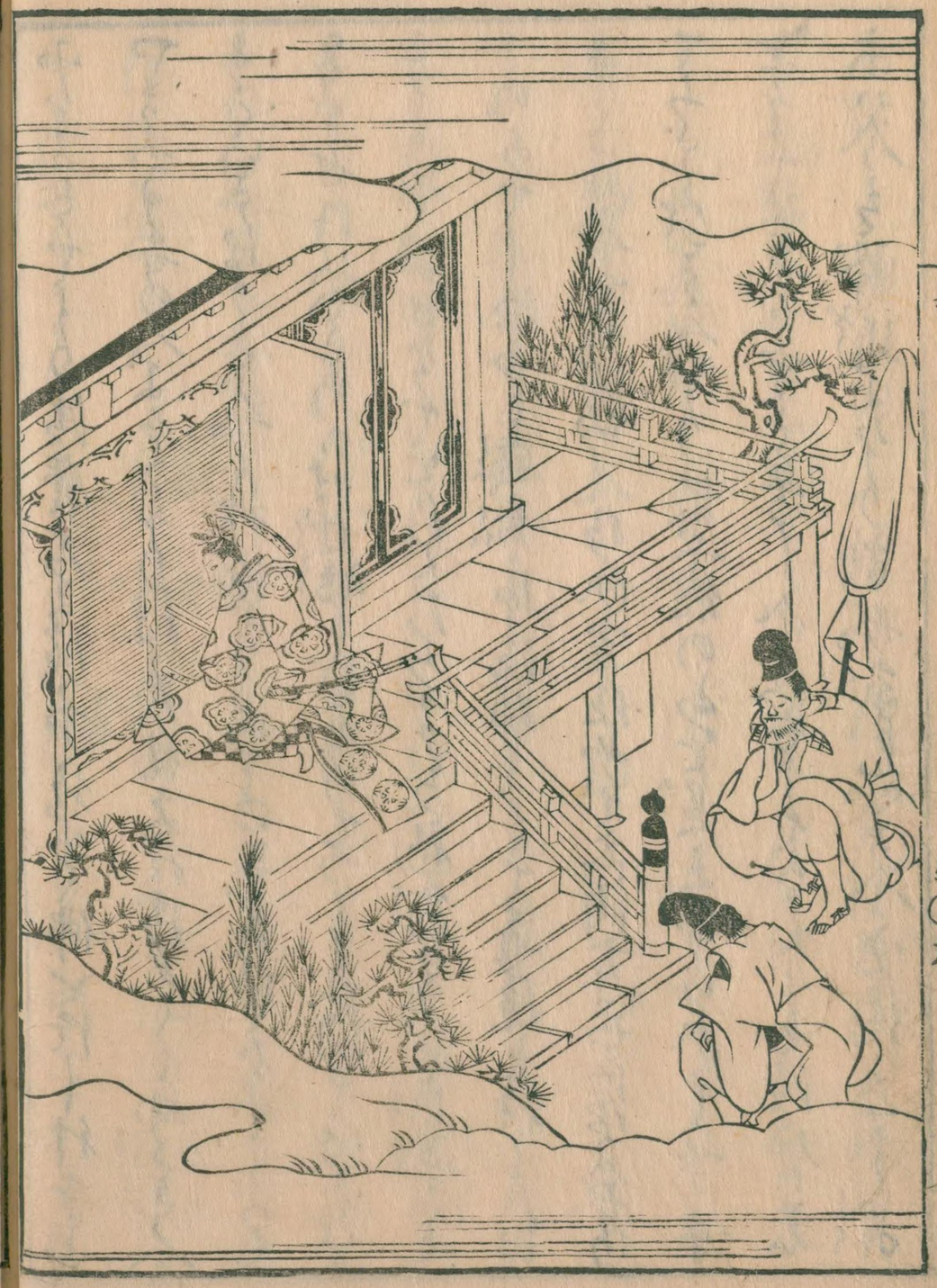
なりきつきはくみまとまいさかまよう此

人のこころをまれますれめや

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

と詠じさせ給ひ今て神勅は柿實祓天津月嗣にて
有天照太神の正統なりでゐれうとれをばげんなんぞ
として君の位をおうさんかれけがうしき事をゆもられ
まうり勅する此謂之今よりなんぐく勅をやむるいそぎゆり
て此よりは養せよ汝はくしんておこゑゐるゐれとあら
をは神勅にくて神はいつせ給ふ君より清磨感流た
まやをほしうは法華をまりて給ふうつりたのよりを養し
給れは道隆う王位のまむしなくなりう君をいさまゐりて
隆清磨を氣くと誘し給は罪なくして古佐西は既流せ
らる神にくしものおまりに是此筋をゆらく山ようすてくそ金

にあすうまやとより清磨君は給ふくく祈なく佛を信し神をう
やまふる世の人はおてゐり給は八幡文は清めくゑゐき人
ゆくいさ給うさ人と神祈をしおとの事をれてなりしかを
ゐまさせ給ふへきある時自鳩とび来りてつくさ給ひて彼筋を
ゐりは正をなでをれどたちまちち新筋をして行歩を
とのおやし給に慶帝即位給ひしくて道隆を捨られけ
まして清磨をめし給ひ官位ぬかは大納言正三位をなり
てふさらびさうへまり彼三位の山を見立山といひ其所を寺
とそそて見立寺と号し今は世まりてゐくくそそ清磨君
末は今ゑ醫道をなり半井家是さの今官位をすること昇



厳せられたるなり

(六)聖廟御守給事

菅丞相と聖廟とはなりくれ野天満天神の御事なり
延喜のみうとにはへ給ひてなりしが時平公
先をそ称しかひく鎌しかふよりの延喜元年正月にほうしれ
配所におもむき給ふ都にて君に梅桜松を愛せさせ給ふ
ときて梅に御心をとめ給ふゆへなれとおしこ給ふ事
東風ぬるを匂ひをこせよむ君のとれ
ゆるしなしとてまうかすれう
やきこしさせ給ぬ相配所にほうせ給へとその夜に都にむめ

配所の庭に花来たり今はほくしの花樹とて安楽なるに
ことなるん又樹は沛にうれをかなしとてやこゝやこゝにくれ
ようにこれをきうせ給ひく

樹はとひさくらはうれくを此中に
沛してやまつのつまかうなるん

中詠ぜさ勞給ひくれを樹を一番に花来りて配所の
庭に生ていたり流らし此老衰といふは是なりとなんかして
延喜三年二月廿四日配所にてこうくれさを給ふ沛にし
十九才宰府安楽寺に葬りしなる天暦元年に託宣を
事出給ふ事は一条院沛宮正暦四年

に正一位太政大臣を贈給ふとなり

(七)石上ちるかく遍昭と小町とおうとかたる事

小野小町いそのかみちるにまうてをり遍昭と同しく消くりこま
ちあんぜうこをりぬときくあいひやりをする

光のうへにあひ祢をそれをいとさむし
こをのうろりとなれにかさなん

とゆくくれを遍昭返し

山ふしのうちのうろをいくるくしかも庵
かさのうちやしいさふたり給ん

この庵にて小町閑口志うるとなり風雅のなりと時

の人多くしらるゝ所なれば後拾遺集十七雑部にみえたり

⑧ 能因(のういん)がうたとて名ある也

能因法師はすきものにて秋風ぞ吹く白河の関と読

て風雅の名をとらせんとある時能因籠居(のうゐんこもりゐ)して人にもあはずして

住居の窓より日にあたりて其の面を正月より七月まで面をさら

さりなれば色黒くなりしをせうようは奥州へのりくだりしと

かたりけり然れども其の事はいつとなく能因は奥州の人が

きゝてなりて一の名はしるせしく名をいのちとしてかたれも

まゐりて行申しあるなり

あしの河かくしろあはせさらさら節

あしくくりまるは神なりしは神

と孫せしかは名こそすてふりく古くれあひきそろえなれ

り和歌はさまくやんとなさるなりなりん

⑨ 西行法師伊勢へまうでゝなに事

西行は人ぞやさしき伊勢太神宮へ参詣して神前へ候ひ

いひて和歌はかきつけのかよりぬれしおりしとかや

なにごとのおはしますかはしらねども

かたじけなさになみだこぼるゝ

かく孫して涙くまりひすりは花地に落てさへさすらいの

らまかりしらて実おもちろつきなるまへくおもひん中に

法能なりくすくしまとろこれを太神宮
あまたゐらひ月のむかりハ神うさや
ひくしめかそれうちそとりかし
うくあらゐふはぎさせ給ひをうとかり
(十)但よし大明神御奇乃事
むかしすみよし御座しろこの所に破損(そそん)に及びそれとも
造宮(ぞうぐう)の沙汰りかかりそれを
東やさむきころりやうすれうさうなれ
ゆきあひのまより東やをくらん
うくつぎさせ給ひそれど座うて法御祭(ほうぎ)をとり此法宮新

古今集にものせられたり
(十一)同御神へ奥食(うとしつく)してまうてをうへ若給ふ法宮
あらいやしきれのこ奥をくひゐる日程よしふまうでをうゐ
んまおもひをうへ奥を食しゐりその男ふくかく
新御社へまいりし事神の御をうめもいりなりしへ
おどろくしくおもひかぶらいと稱人ごろに御して
そのつゝともに拙るさせ給へとして御りふかりしを我
うしろ比り白髮(くろくろ)の老人祝ぐしふゐらたまひてつ
ぎさせおひそう奇ふ
御ふ乃ろようれこほりのうをまても

これしらハなれ世をすくふとて
かゝ法をさせ給ひけるとなん彼男仰ふ此事のものまて
えてかゝるや

(十二) 熊野(くまの)権現(ごんぐん)法所此事

ゆゑ女みくまのへまゐるに(にゝ)係ふ月此さらりになり
なれどすくふもえまゐでひきとりて宿をとえて此
事をてくはまゐてやしなんと日数のふるもうれさくお
もひとつゝひなる夜の事なり

もやよりもちりふましかれ神なれど
月のさとりもなかるゝ事

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

うくつぎさせ給ふゆへそれよりまうてけるとかん

(十三) 熱田大明神御前の事

むかし彼御前の大文日尾法氏の御がし一人のむすめ
をりの名を松といひ申すそれは菅原の季範といふ人たる
しくなりそれぞ親もこう思ひむとふとりて大文日をゆづり
あくおりひ申れとも神宮をとぐよりそれを明神に御
うつしむかうにつ申給ふ所

さくらそれちりなんのちのうきみうりは
松まつ思ひ菅をそのまむ

かゝ家現をうまくやがて神職をゆづりをれぞめてさく

さうえ申ることなりむ

(十四) 石清水御前の事

ある人石清水の社にこもりて百万遍の念佛を修行し
申れは又一人こもりあひ居る人物語しけるは三心具足
せさしん念佛はけふへうらびとうきれぞ彼人おりひをうは
相はこれをもしらねはいてこつる事まやとしひとつる
むかがらまじあらせ申れそつをさせ法師は

しかりせぐらやまのあくの花を見よ
そうす入てはおもしまほいう

あくまでしうるとなん又或人同し社に籠りまく念佛し

けるうれかなも殺人二人をさく一人のつみやう念佛の通教
ハ多くとなるがすぐなるやうへと又一人ハ殺ふぶつくや
となるふるこうと中人をさくぬさる人をかれいつまる縁り
ようらんとおもんじて殺ふまる夢を
谷川の木乃葉にうれまんいりまる
なるおもゆくしてなるも殺く
かくしてをるに彼人とくがしをするとなん
(去)惠心僧都ハ家をすれ給ふ事
惠心僧都ハ家を相て絲語にて學文のさとりなりや
きらひなりしが一人の児をさくしてこのあり惠心ハ

なるうれ殺をの手にぬるりて學文をかくしめらしさ
やへ送りうへさんとし給ひすれ此しもの殺の水むを
ぢくこの児
もふむしてふるに屋とまれ月ろ事の
ゆるうかきうれ世にもすむうれ
と紀貴之ハ家を吟じをれと僧都ハ家をさてハ家を
いとしきものなれ観念のそうりとなるものをとてそれ
より頻に家にすきおひてあ法要經の二十八品の乱け
楽なるのんかしかみすひて集りも多く入しと
(夫)古家を吟するハよひにまさる事

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

の系三位後成の中にて折ぬしのおりしろき比なりしが
どの長めらんに邪しゃんの字よりまんよりは時にうるひさる方
を吟しゐるはよりひは面さるあしと前の弁えとゆのしが
俗系乃ちに伏ぐ其れ人に私中にハ得ぞしてさきるにはとく
ぎすれ一しゑ鳴くこけるへ皆字よりはんとおりひさるに
女房の聟して浪のまとりれまぐれかなにとりしさり
こゝか人感嘆し事新字えよりはぞなりしと是ハ拾遺集
に五生忠見る所に

いはしさりなきてゆくらんあとなれ
よしのまとりれまさ取ぬりけり

といへる字をもひあるなるへし鍬に面白き風雅にて
拾とむしよりはいひはさへあり又中山忠親といひ事なるへ
き一世のうちに年内三夫といへる題より事
やしのうちにまハ来ふかり一と皆紙
こうとやいそんといひし人をこそあれ
と吟じてさしに余の字よりまれさりしと

㊂源頼実字計事

頼実ハ一生のうちに名字よりませあへとて但よしに月詣し
事命にうへて行りをれある時落葉乃題にて
あの葉有る屋といきくうこそなり紀

しぐ是すら和も志くれをぬ和を
とうみ事ろがその身を何ともおもひぐ事をれを程程
吉まいのりをれをあろ和の法身現は志く是すら和も時あ
せぬようもとうらし奇ハあがよさせたろぞとつぶさせ給ひ
事ろしなり

(十八)道周法師家に執心の事

道周ハまたかき執心の人之七ハ中にあろまで秀奇よませ
給へと事お行より住よしへ月詣志たりと後成ハそのこ
ろさしを感じまひくふ我集えたれしハ道周身ゆりて
ほのことあれともなき給までんぎしぬろましものなりとて

家十八ハそをつまをへりをろに夏の中に来りて涙をかかし
法よりあひとうとんすひ給れぞ程衰がり給ひくさしに
二そをとらへ事以上廿首になされありをろと対称のす
ともにく給ろあらし

(十九)和歌くとの家なん事

人九ほのくとゆうしのうらの奇にさゆく奇鶴の給ろ之
もしぎやくぶやまん人ハそのおとろへき朔日にむかひて此奇
三反此じ妙法蓮花経の題目廿遍とあへく給んに行事を
たちまちおつ給ふ妙なり対の和秘事之又和ろい称く
何時に起んすをとらうバ此家三反此じ題目廿反唱へ事

ゝ起へき時刻を観念して所領し必用あるまゝ

(三十) 猿丸大夫の事

猿丸たゞいめの程は深草の里にすまして出家うりて侍りを
れば天智天皇の道を達しをるよし大内にまゐりあるとき
禁中のほとりを大臣うりくるまゝを取上人なとゆつをく
あまめせて先されとくあらひしよりそのゆゑし侍りしをつゝ
まうれとゝされはまらぬ所にもとくとて先祖をを祈しけり

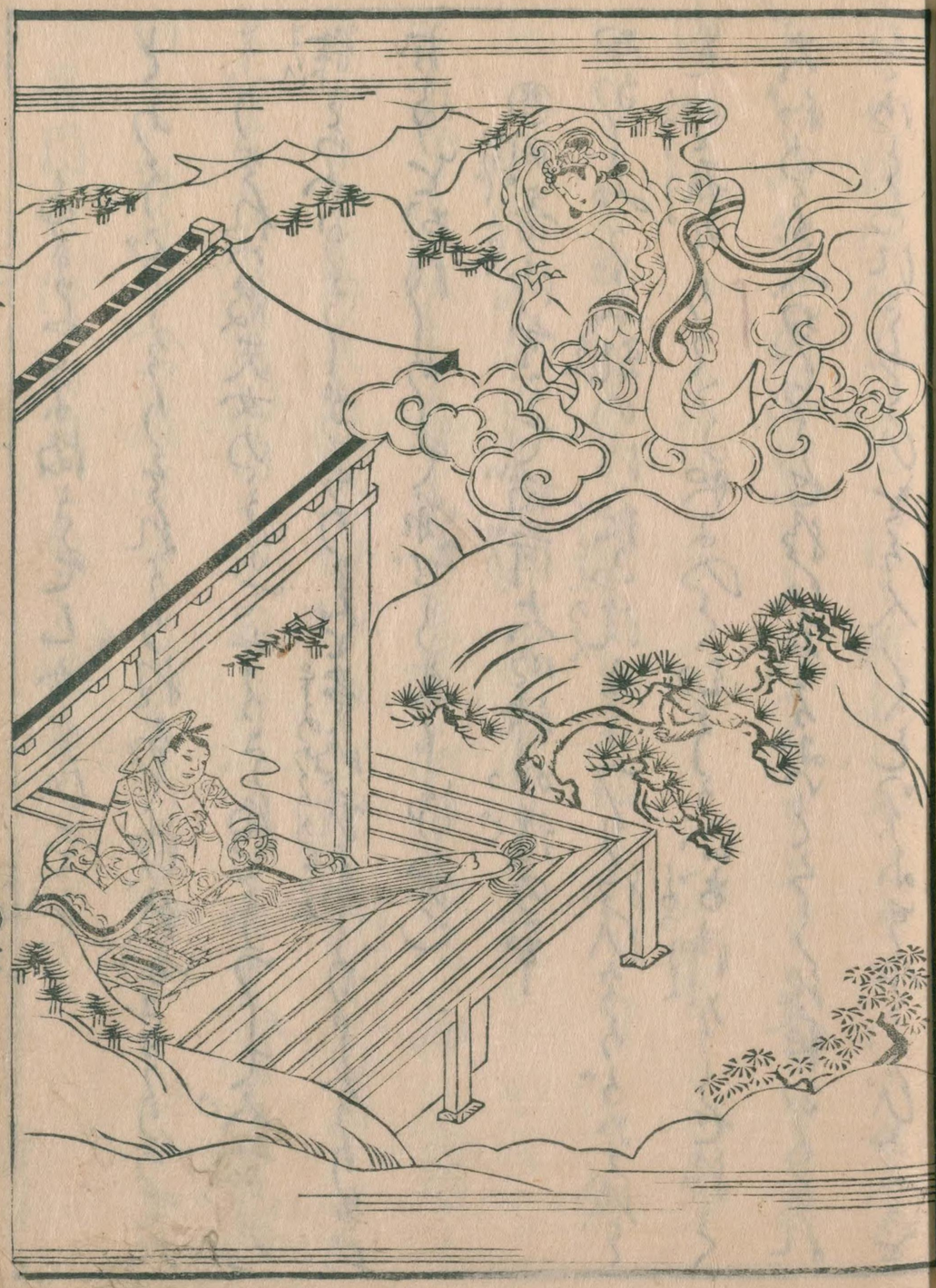
あらしもたゝはしちへうゐまをし
あさきこゝあしのうらにすむひとも
見るはあらぬものとしれをるに侍らんとおもひし

(三十一) 怪醜酬天皇岩跡にゆく天安とのはなし

怪醜酬天皇よしのにおとし給しに其所岩倉せさを給へり
にあまりにかたくなりなりありさゆとおぼしなけれせ給ひ
事なれ神ふる山のまちうくみしまうれを

神うへとあさ川をとめもおりひいまよ
よしの山の天乃ひかしり侍

やとうちなりあさせをひ月ふるかまておかしゆしまうり
法爰とをなく神ふる山のうへよりふりもそすかむさて南殿
乃法庭のあをうまして楊枝とゆりけるにそれりせ沙
あがしやうせをへうゆうさをとめのすゝこうちしりまをあるが



国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34

ガラス使用

ぬまやまはぬきてし女さひきも
とあうぐしうりそれより程なく御代おさまりあてた
うりそれは彼天女のうかでなりさぬをうつして文節の
緯とらかるをしまきり元を其時荒玄とのりなりその
古事をおほしめして詠ぜらしし御歌の
(廿二)同帝御所すて稲荷大明神加護の事
おなしみかど一乱の法紀山院のうつり給ひかうがな代
も皇孫なりかくて我はのくむうかふお御なりせ給く
大和のうへおちさせ給ひ守りにいとくしに和なりそれ
ぞ法ともにさふらひをう人くもいかにせんとよびあへ遂

きうせ給ひくちらはいはくれ程まやとすぐ○させあひ
きれどいなりの御屋しろのまへにうと養しられは
御歌
うもむれくらきやうちよ風よふなり
まれにかうさなんみほのさりし火
ゆゑ詠じ給ひ事あしおうさせあひ守れば御屋しろのう
風よりいとあうさ雲一むらぬちおく陰春の月をてら
しをうり事大和のうちふとらふよいらせあへはやうは孫
のうたけれう人にくきしうせにをりとなん
(廿三)同帝御所にて夏ち給事

たまいらせ給ひくむきめかどいさせ給ふその後はまへまり
あるりあ云月十日あまりの比ひとあつきおかしなりを
まづいづのつぼ○庭におくまへかうし月のさしいでく
いとあくまなれど

すしさ松ゆく風にすらまゆ

ゆりとに屋にて秋まの月かを

かゝれきく人もあらじとおもりぢちまへるに松の枯れかさ
よりかゝじをうる愛してゆどよくんまづうなれど即分も
すしとうふ大きさ絵の下句をうふまんあぎ給へばさかがら
鬼の形かく翼のおひかなるが服は月よりもおかりを

ゆうにをけきものゝぬれんもきしうせぬへきおうちはら
むかかく縁にさふこそうれさもあらばはまいうかるもの
あやあ風しくうかはりとへとうれくまゆ春の巻を
おこそ絵を女院の御為に命をなりさふしませあてを
なれあとにうらせ給ふんにこそあまそれさへかく絵をばいと
つゝぬくうれすうさにかりてうるしき事のいやまかれど
うらうなしんとおひくはまの比よりうしろれはさふへ
ども御おにはおうまてくまゝにはしまりは給ひなんとそこへかれ
ばぎにさうるまゆ及び絵りぬされどうしとなるへき事かを
そのこれまたひるしまへうぞうしまくまどうりおしはやて

とつくひてんさうにてもあらはれいりあり事ようよりあへきんは
まうせ給ふんとのたまへそなぐそのまゝりにさふへ法とふ
らひよは法親王にしくはあらじとおもてさしがすへりなんと
いふ給ふんとうろはいづくにかとひおもひなれど露とこそにし
船の系をしそかさむはいらはくさふへとてもをさしてむ
うりとて行をうん遠りては女院の御前にまいりて申ひ
なれど海ことにしひとすれてとそるしつまとてあけの日
吉水法印に御堂にて法親王を三七日供養志ひ
ゆうにまはあへて事なりしとうひてやうんいとた
のもし

志ひ葉草巻中

㊀下照姫の奇の事

古今集の序にくさくのあはれにしてハ下照姫にもしさ
ひとしてる姫とは何めるにもこのめなりせうとの神乃
かたらかうぬにてうはりてかく海くとよめれ志びしすなり
無しこゝ此事ハ天照太神天上にはまして下界とうんそる
なし給ふに大己貴命と少彦名命とんとあるや天下を経
営して是ゑおがゐなりと知じ給ふより天照太神おほ
しめひにはそれ天下ハワがかぞうの伊弉諾伊弉冊乃
あ神のうしなへる処なりとをのが領じ給へきにあらひいそ

ぎえしなんとの御使をかしまふ時第一の御使にハ天穂
日命第二の御使ハ大背飯三熊大人第三の御使天雅彦命
なりこれらの神ハいつ是も無神をとしひ給ふべし下界にとぐ
まり給ふ中にも天雅彦命ハ下界の神れむすめを見たり給
ひくこ是に御ざされて天にゆりかゝるをとゝそれを御し
ましをる事にの御使に名無雅といふ事をとびくとして
との様にをとせしめ給ふ無事天雅彦の屋うちのおよそし
樹に羽をやすめてをさゝ御をとゝろに天雅彦れ御うちに天の
さゝめといふものあり天雅彦に御をくれハあやしきをさ
ゐりて門前の樹にとまりて内のありさ御をうち御射給と

し給へとゝ天雅彦太神文よりあづを給ふ神代のうごう
に天のうゝ矢をとゝげく事れ事中を射とゝ給ふ事その矢
をくゝりて天照太神の御前にまゐる太神みそなりして
矢に血付たりいかさ御天雅彦が出御神と見たりふ事人と
其の矢をなげえし給へば天雅彦のむねにあたりてたち
まちたしぬされバ今の世にかへり矢といむる此ゆへ又
ものくさ御たげとゝふものの俗にあまのじやことゝふハ此あまの
さくめのひ語りなり御京都獨行う
とひくされ名なしのさしを射さりせは
あさのさく矢をなけさし御し給

やしろのかゝも此古事にしたがして天雅彦死しぬへるを父母かゝ
ちゝのふ下照姫のこゝろを味鉏高彦根命彼父母とよつて
うんとて天にのかりぬへぐそのうちら天雅彦にうく似たりを
見ば父母及ばどへる神天雅彦れうへりぬへてとりけ
きはしうろこひぬふ神代にはくらし　味鉏高彦根の命は容顔美
麗なりしうはそのうを八の忌八志谷にうつりてりかしやき
なれえいそこしの下照ひめ命をはらりていくく
あもなるやそこゝあかくこのうかがせる
あまのみをまうあるをれさしうやこゝあは
ふたうこし須味鉏高彦根

かくよみくはしへる神に天雅彦にそはなきとしたしせかつて
(二)伊勢斎宮の事
天照太神へ御杖代にて天に位につき給へは内親王の
いまだ嫁し給ひなとえらしト定してうしあひとひくさだめ
給ふ前内親王なき時は続王の御むすめをも定めらはし例
を定まりて二年あの八月よりあくはらし此八月まで於く
天とうふにこもり御しますと此ろに三年の神事三度此
禊を賀茂へもなしおくし伊勢此斎宮は娘婦の師と云
に齋のふ賀茂へまつりぬふを斎院とし紫野此於く天にこと
ゆ給ふ斎のなといつきとしむ太神といつきうしつき給ふ也

いつさ乃ふやとも毛之所文のいふ詞して佛を中の經を深
紙塔を河良く伎寺を瓦葺僧を髮長齊を月勝見を
内の七言とふ所れ七言とふ死をなくとる病をやすし哭を
ちかゝるゝ血をあせ少をなづる肉をくさぐり墓をはらく
しといふこそ詞花集雜部に選ぶ内親王賀茂のいつさ
やしろ時雨にむかひてよみ給へる

おもへともいむとていとぬことなれも
あしにむかひ事行をのこそなく

柳所文の始は天照太神の御具を内裏に安置し給へ
事天子と座を同じくして給ふ人王十代崇神天皇六

年は御神威におそれかゝく其歌入姫の命に詫て大和
の笠縫邑にまつり給ふ（日本紀事六に委し）十一代崇化天皇六五年三
月に天照太神を其歌入姫命に離して倭姫命に託かふ
さらに倭姫命太神を結殖せんかと求てこれ国にあり時り
太神倭姫命にをしへ給ふ神風や伊勢国は傍国の可怜国と
見国に居らんとす故ゝ祠を伊勢に立しけて永久をゝ十代
河ゝに立見と儀の文と云（日本紀事宮に委し）十二代景行天皇二十年二月
小ゝ百聖皇女をはつりして天照太神をかしむ古三代如此なるゆ
為に代々皇女を伊勢へなりて給仕せしめ給ふ也

（三）正月七月の菜の事

正月一日を雛日二日を狗日三日を猪日四日を羊日五日を牛日六日
を馬日七日を人日とらふ人日に菜羹とて菜の物をとぶくと
是れ其人百病邪気をのぞくとらふより七種の菜とは上天に
よりて百歳まていくひ服する也公事根源に云供の菜事寛
弘ノ頃宮に始ルトさて又延喜十一年に後院ヨリ供の菜ヲ云々
七種の菜とは
せりなづなごぎやうはこべらほとけのざ
すゞなすゞしろこれやなしくさ
ごぎやうはこと草也はこべらはこべ也（ゆひこはゆひこけ草也）ほとけのざはゑん
げ草すゞなはかなすゞしろは大根也古今集云とは仁和のみかど

みこまかしゆしまう時人まうかまひかう法守
天ったあとこれの船をしいてこうかつひ
こうこうもてかきそゆりけく
代わのみうたい光孝天皇みこかしゆしまう時とい親王の御
乃事也此御方にくんれへきやあれんにまの袖なんいまさ
保宣の長女にあれども天ったあるんがいとんぐれまの乃事にいてこれ
業をつゝ給ふ衣手に名いかりなうしもといへるんに天ったゆめとらふ
処衣手に名へゆりつゝしき処にんを付へしとこしらふんを
細川幽斎の云名にかんかんの方にまの親王の御身にくかしかと
とく幸賀をて人を憐臨を御心にまうかくやさんいまうが

あめといふより上一人より下万民にいたる御心也

四六月六日茶湯のこと

清少納言が枕草にせらるといへる処に夫さいの文にはいへ
度より御くをおしてあとこれ系をくしさげてさいてせられた御
情あてさうとやれ程のたたに付たり 竹田公支根源に云六月
六月節会天皇武徳殿に出御なりて安全を行ひき那御
酒を給ふなり内弁にも四家にかかしへて皆あやめのう
らをうく月うきのかづしれこし典薬寮あやめのつゝをなる
那御に茶湯をたまふ文をのいと紙もつゝ刻ぢにうくれど無礼
をもらぬとかしかく行り荊楚歳時記に長命縁綾命縁

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34　　ガラス使用

狩なりし人をもなくみえりけれとも

○七夕まつりの事

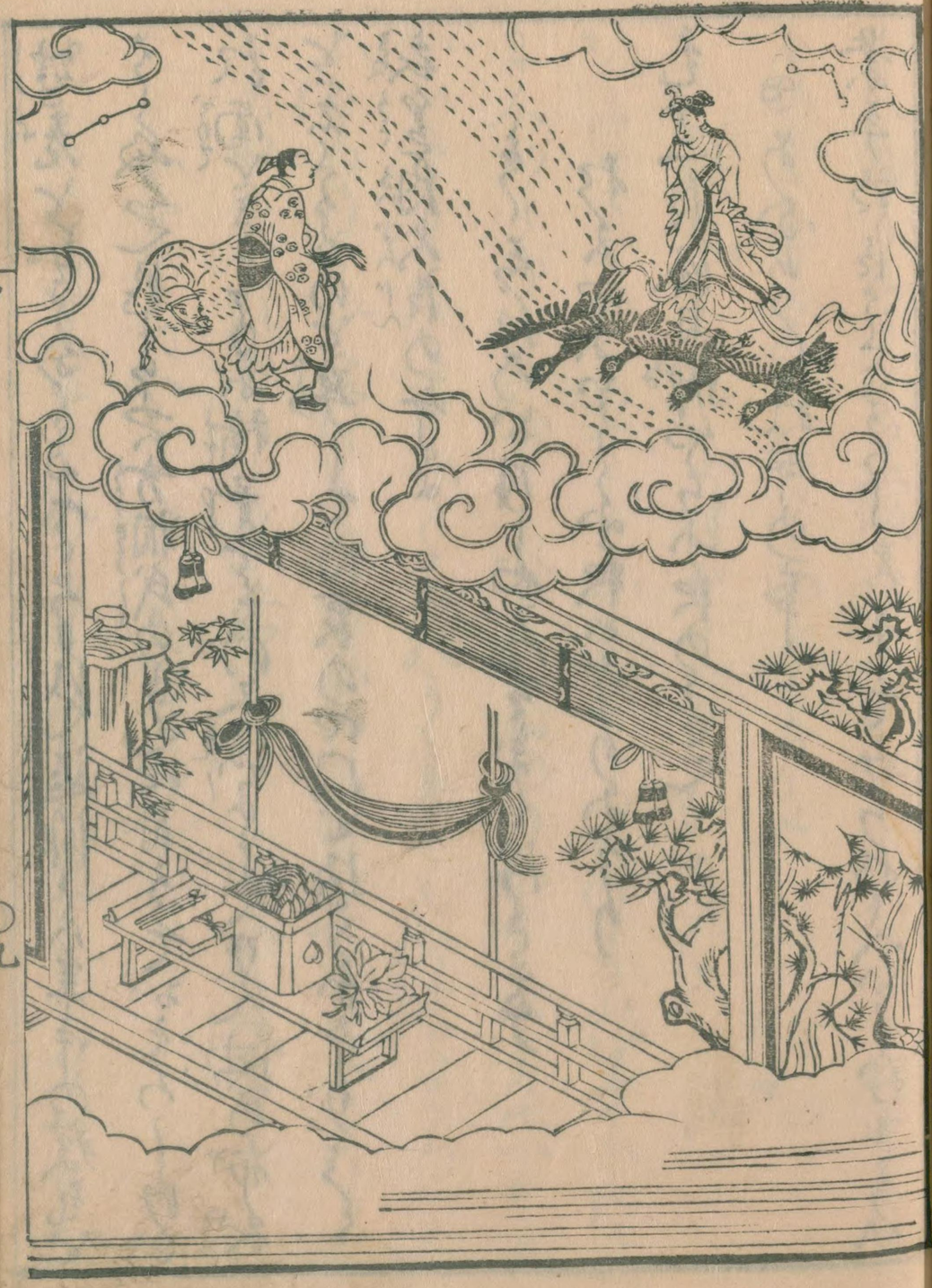
公事根元に云七月七日の夜おとなふくろ天平勝寶七年より
しゆる乞巧奠しも七夕祭ともいふ今夕ハ牽牛織女此
星夜なれバ烏鵲天河にあつまりつくえ橋をかけて織女を
わたし淮南子に續斉諧記などにもしるせり香花をそなへ供具
をそのへて庭上にまいりて牽牛のせしれなる此果をうけて事を
いのるなり其の外ちまき何ひかなかてそうりとの哀にも乞巧也
なかり風土記に云七月初七夜中庭を灑掃し酒脯をまうけ
て牽牛織女に含夜をいのりとの成祈ぞとこく成ハ白天

漢の中をきろの藤くらる白氣光耀の五色なりとあれハこれ
をまつてもりし寸海をまみのもの便縁して福の富を
をいのりとをみなるものハ子となる雅つとつてとよねよろ
孫来りとをねずれ三年まして乃得ともくむりしてそがふ
ことは人のは本このりて行よいのりてそくあそこそりて織
よ銀河よりてかりて牽牛織女よ多しまきをひろと篇翁

実方朝臣の哥に

はつ秋の門かよふもあそこそなれともん
りみちのそしいちりやちしくみや

りみちれそうしもん淮南子に烏鵲填河成橋以渡織女



といつり見と烏龍紅梨のそしたいふよりかくよめる也

㊄ 追儺の事

追儺とは疫鬼をおひたゝぬる也禁中にて十二月毎月の夜
行かたゝる也文武天皇雲二年まとゞゆるゝしたゝ下に疫
病をたゝく人民なやさしきをおひたゝしゆりしなり
云事根源は云今日はなやらふ取なほど大舎人寮鬼をはとめ
陰陽寮祭文をとりつゝ前後のまつはしまてよひ上に以下と
ほとおふ後上人ども御後の方にまつて桃乃ちあしの矢にて
射る紀苑門よりへて東庭と面て御にのまにいづと取はし
所にとゝし火とおかりくとゝ紀鋼蓋盤所のおのみぎり

鵺(ぬえ)といふばけものきたりて悩まし奉る年中の疫気を
はらふ儀式にて方相氏(はうさうし)のごとく目をおそろしげなる
面(おもて)をきて手に楯矛(たてほこ)をもち文儀(えし)をもつて其人(えん)の布衣(ほい)
をきたるものを率(ひき)ゐて内裏の四門をめぐるなりとぞ
衣笠(きぬがさ)内大臣(ないだいじん)の哥に
としくれてのおにはらひやいふらんそれさへはてさとなり
おそろしきものはこよひなりけり
是十二月晦日儺(な)やらふ夜のことゝ

㊆ あなめあなめ此哥の事

業平朝臣みちのくへくたりてみちのくへおもむきたまひ
しに夜ふかく野中にやどりてやすみけるに夜中の頃
何ものともしらずその上の句を詠じける声あり
秋風のふくにつけてもあなめあなめ
かくよみけれはあやしくおもひて立よりみけれは
其人なし死人のされかうべありて目のあなよりすゝきおひいでゝ
おひたりける風にふかるゝ音なりけりとてそのところの人に
ねんころにとひけれは小野小町この所にて命終りぬ
そのかうべなりとかたる業平あはれにおぼえてその下の句
小野とはいはじすゝき生けり
かくて下の句をつけてそれよりかく哥をよみてとふらひたまひけるとなん

世事長明無尺抄江記なとにハ葉子とあて又花蕊青紫
抄なとにハ人とあたりを清輔袋双紙にも人とあて葉
子とハいとに親房ハ実方なりといへり一変しかし
(四)當代菓より時鳥お沙事
万葉集ながうたり
うくひすの　うひこの中より　ほとゝきす
精むまれて　さうちく　似ていなかるや
さうたくに　似ていなかすや　即ちかの
けうの物へより　とひうあり　き鳴とあり
あらたかの　花をゐちしく　おほかすは
なけとすは　まひハせん　なくな行そ
まうあしの　花あらむり　鳴まさる馬
是うくひすの菓よりほとゝきすのあるに花を
ゐちしとハむなゐてちゝせとあるのかハむめかすなり
まひハせんとハまひなりひとせんとも世の中をとりてや世
よの人いひあへ所をも
當のうひこれなりの時鳥さう又は似てさう毎に似す
とあへりうやうの所ハ万葉にもとりてにあるものともしきぬ也
又古所より
うくひすの古菓よりいはるなとゝきれ

あひよりもこゝ聖のいろうれ

㊈ 女のりしへきぬを送りし事の事

むかしまことをうれしこあつまへてうり事得りをうう家なる
女のもゆへきぬとてさんやうかとて

くれとやりあやまこれしくありしより

ふさはしう山もさしはなりかぬ

後撰集の事なり事乃ふはきぬへさんとおもしといひ
二さんをふさはしうとらふされ二はし山さへきぬとは一定さん
えゆうぬとらゆきと二村山よりやくよみうかり二村山を
奥河の国の名所なりくれんどりくれあやといふんとてのまく

らことなきあやとも一はし二はしと云かし後二はしかしもあり

㊉ 伊勢大輔むつきの事

正月一日ある人の歌をうしきれば伊勢大輔むつきをやはり
とて事をうしてそへをう

見つゝしくなふあらそはう寝乃事を

ふせのむつきをうさぬへおうれ

正月の美名をむつきとらふまよりてその月うまれあるなる
是は繼縁にそへくよめる之繼縁は本をいたれあるを衣之
そのふといひて寝ハふもの見ようとぬるほとに寝乃
事といひて事の正月をも言ひ得るへしと祝ひうる也

十一 ねもりの事

ねもりの事しるしは田舎(いなか)にねもりといふ事なりと
いふ事は似てせかくろくさらの事あし所にて山血をとり事
女のむぢにぬまば一生その血(ち)をちぢしるれともその女ことに何
まれその血をのはうかつうと云ふ

ねくるつのかさなることのうさなれば
ねもりの事しるし今はあしし事

ぬくるつのうさなるといぬぎをきるくろいてぼらんのあれ
だをのつくうさなるとされバぬくるつのかさなりあるす
ゆびくくなれどさていその女はいてぼらものとしるれはつを
をきしねもりの事しるしも今はあゆしと云

十二 うなひし女の事

津の国あしや の事にうなひし女といふもしをりみやうく
ふさしうるはしきものにくかんあれば見よんをうをし
男二人あるより一人は初(うね)ぬ一人は笹田(さくた)とうひやうがたもに
よの女をこひくあしそひをり女のいふやう姓生田の門に
うへ朝夕を射くさせあへ射れたる人の妻になしんと
いひなれば二人とりかもを射るに二人の矢一度にもより
あたるされを見て女のかしとしひ事

後にひぬまう身なをんと津の国まん

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34

ガラス使用

(十三) 綿(わたぐ)来の事

奥劫れ云ひものする事しきゝ此あしきゝ此事色く乃説を
しられしともそこどうしゐる事をゐつるとも説よろし又綿来せ
いふ来ばあるほどにその来を紫につゐて門にゐつるといふ
説もあるとも子(ちつう)来とよこゐれど紫成子ぞくになるまて
毎日ことぶるまへうしびそれゆへちつうといふ事も表説ありに
来と半時を紫子ぞくこ子津(ちつう)月半時ハ子自之津ハ例せるや
もちろ子之をごとる来なれば来をさいしきておかふ人の門にゐる
うちの女日ゐをうゐなれどその事をとり入る之日ゐせざる時
ハそのまゝとくこゐる人もいけまでも同ゐするまでとくこゐる

るでハりるやゐてぬなりひなり

あしきまもちつうにうきりなりせは
なし成こりすさふにそてゆしものを
やこゐるゐハこゐる来一とこゐまでゐくゐるを説なりとゐ

(十四) むゐち常の事

常(ひ)陰(ちのくはうしま)山麻(ひ)鳴大明神(こやうじん)の寅前(かうぜん)にて夫婦のとりむすひをと
子事なり先男たちりゐて分ゐ産を女のうさより常
をかを紙神前に次第くにたりしへとくこゐその常に女乃名又
かやの名まで半身てとく紙半身のうさを下になしてとくこゐ
さて神を神前へむうひゐの門をとまいしせ彼常をれて

一毒の在はゐるゝ男はいたゞ又つぎの事とゝなく二毒ありぬ
ゐる男はまたひうやうにして二十毒三十毒あてもこゝから
くのとやしその事のみはあくせくまゝ婦となるゝれとむ
ゐち事とらふ也うたり

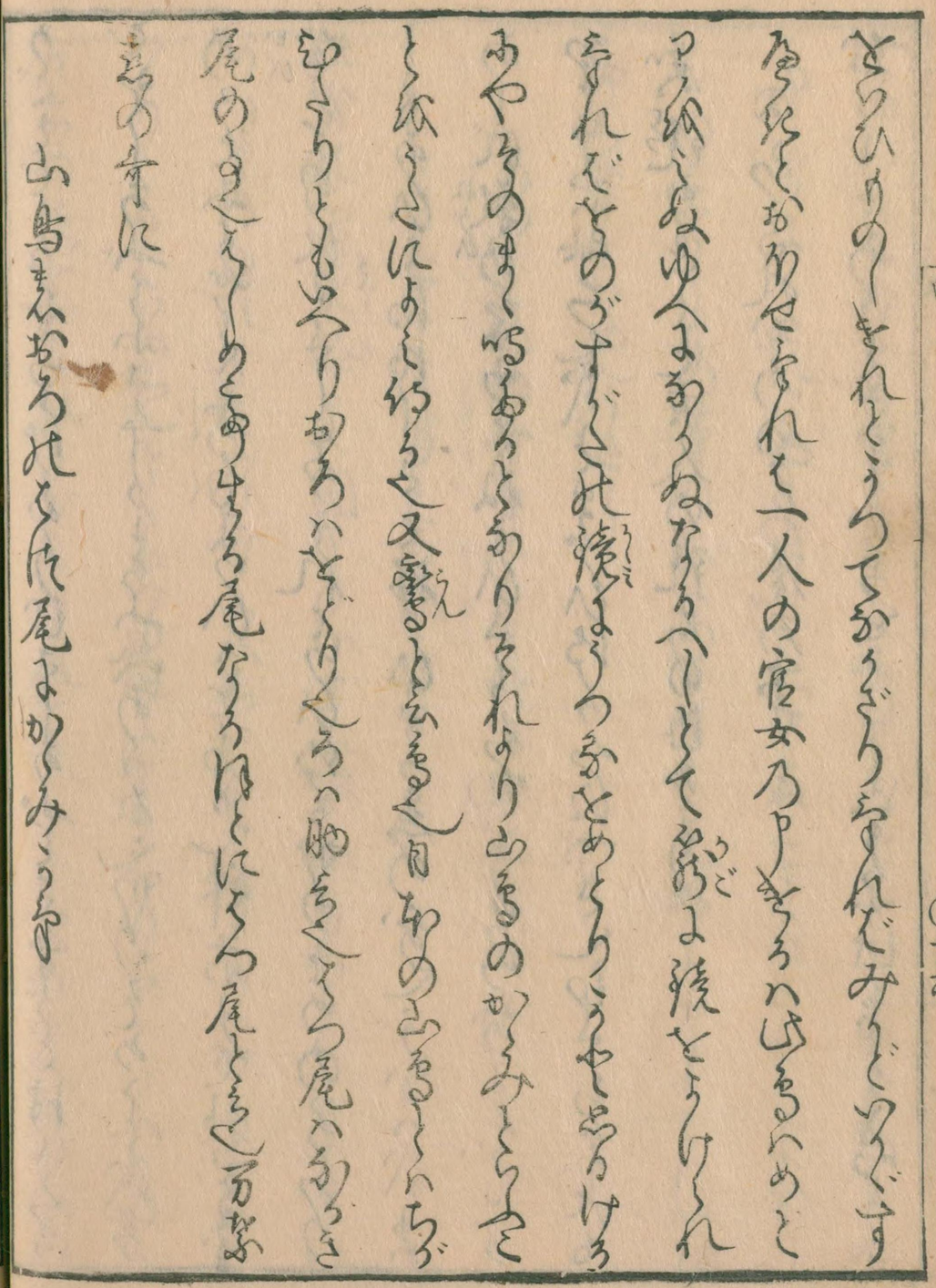
あつさ語のみちれくて形るむたちかひ
よとやとうりもあひとてしるか

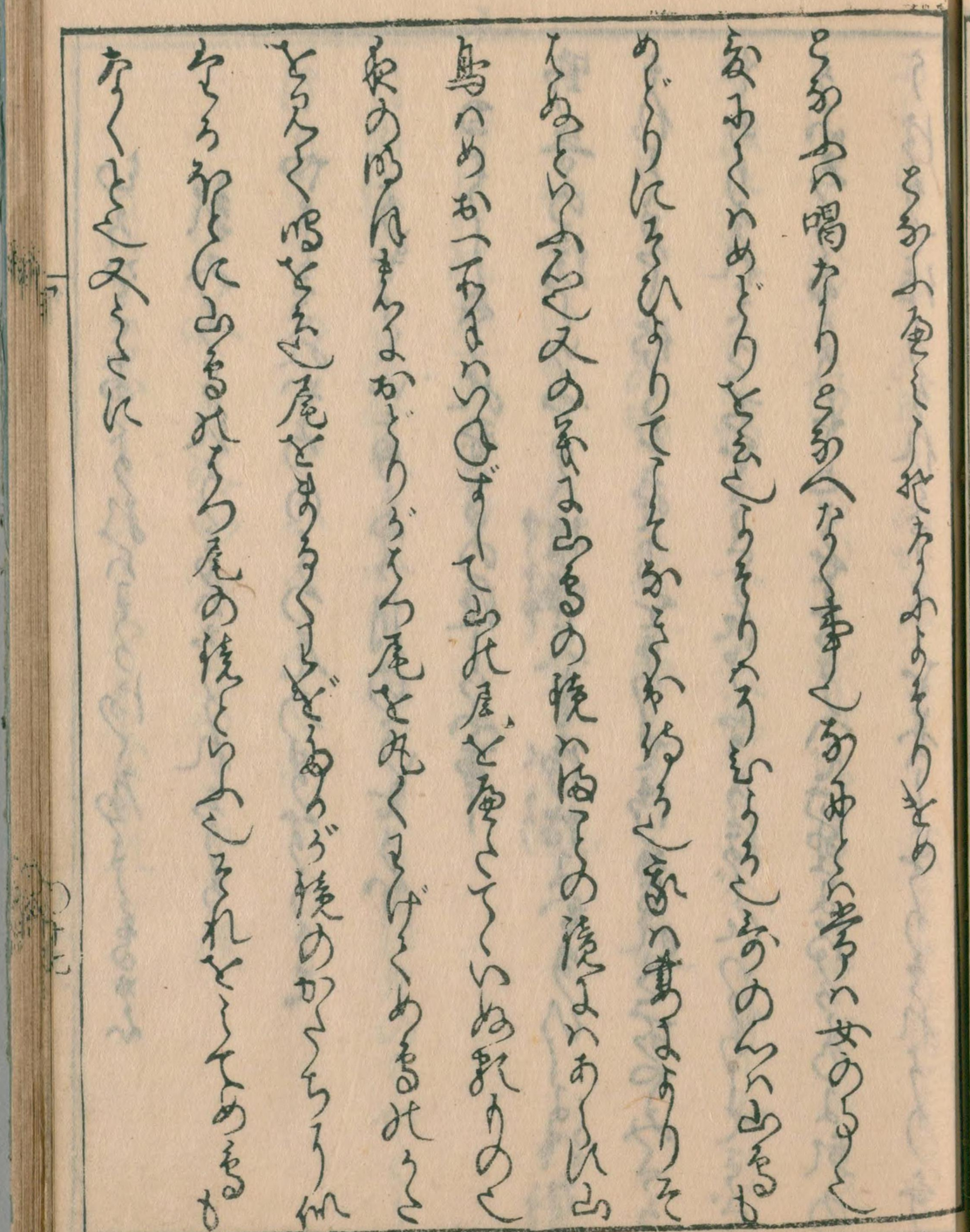
此事れんは東路（あつまぢ）とは関よりむうしゆゑかあつさとらふその
何つまの在れくてなりとらふんかとゝばかりいかりそめに
なりともやいふ也そくゐの間はすゝ石の事とらふものは
左右の語をかゝれうぎゑそれとうごとらふこのゆへはあびの

うごとぞうりやいつけゐりむさしあぶさすがとはくらう
ごやしあぶさすがとらふ処あるかりそめこと此事
乃うとおうせく表句（しうく）はいひうをゐり也神前まて神とまが
事（かび）を男にまたしゐそれといひ行うかりそめのうかり
ともあひこゆはしさと称ひたる意のかゝるがかはれ
あしび乳（ねぶひ）の字をくねうひたるんといつまの字をてもこう
なといふ所ら也我とまがひ行うんはべきと起たる事にも
異説あまとも古人の説右の語なり

㊟山鳥れおろのたる尾乃事

むうしをろうしよるも山鳥とまたしをろがしも鳥よく鳴よし





とうひりのしきれとうつてなかぐりなれどみどいうぐす
屋にとおりせなれも一人の官女乃中きろハ山鳥ハめど
口ゆゑゆへはなりぬなりへしとて鶴(かご)は鏡をよけれ
なれどをのがすがたは鏡(うしミ)にうつるをとりこうせ思ひけり
あやそのまゝ鳴あるとなりそれより山鳥のかゝみとらふと
とはうさによし行ふと又鶯(うん)と云ふ也目ゆの山鳥とハちが
ひさりともいへりおろハをどりしろハ胸ゑしろ尾ハなかき
尾のまゝしめしあはせろ尾なろほとにしろ尾とも云ふ万葉
志の中に
山鳥まんおろはしたれ尾にかゝみこうな

となかふ屋ゑしかたなかふよそりをめ
となかふハ喝なりとなかへなく事也なかゆとハ常ハ女のなと
なかふくハめどりと云ふとよそりハうむよろ也なかのんハ山鳥も
めどりにそひよりてこそなかきなり也なかハ妻よりそ
たぬといふ也又の家に山鳥の鏡ハ内ことの鏡にハあらに山
鳥ハめおへ下まハいひずして山此尾を屋さてくいぬ事ものと
夜の明ほまんにおどりがたろ尾を丸くまげくめる此うさ
をうへく鳴をゑ也尾をまるくまどゐるが鏡のかたちうれ
なるなりとに山鳥のたろ尾の鏡といふ也それをしてめるも
なくとも又ゑさに

むろつきこゝのよりれいとうゆく風さゝるゆゑ
氣みろとれうきハなりれ事
やさしきれおろのとろ尾乃ますうくを
こうをくいこゝのゝ月のうをうか

(四)そしゝゆゑれ聖ちの後といふ事
野守の後といふるハ雄略天皇御狩ハおまひしに清寶
それとて見て侍らじ聖ちをゆして御寶れをやみたる
やありそれをとさゝうにゆきうほどにいりあしてさぞ
うふしりゆううやとをせきさへぞ此里に侍るのに氣の
うほりて侍りそれをやよしを養しをりそれより命

ふもはしゝゆゑれ聖ちのかくみといふことなりゆゑのかく
こにあられ聖にはうろの乃事なり野ちといふもよかられ
聖ぬ守れものにかきうへうれ野に住人なる風し命に
そしゝゆゑれ野ちのかくみえ事しうれ
おりひれもそれようなりしうん

(五)月れ孫ずしの事
月の孫すし日れねをみといふ事あり月日のそやくう
ほりてそうかき事ふゆとへくいへりあり
露乃命茶れ根にてうかしまろれ
月ゆ孫すしのさいりしをうれ

しんハ鶴ぶふりなりに落ちるとて落ちハしぬる程に
堀のそこなる草にとりつきこれを得てこぐ事り
事その草の根をほりあるとき月のねすことハ月日の
たやくしく鶴のことに命のあるにものも無くて乃命
のこしうくなりゆく事をいふなりしぐのあやしむまれ
鶏といふも同じ心宗廣のまつりあらうさおくむほしき
一おしくに命ぶみしうくなりゆくなりむ海のこまとハも
乃くきにまよりるのありくにらうことくちらくとみて
あるにうき世のたりにさしきにしたへあるをふあるに人もあれ
ハみくぞきのふ乃人もなしふハなきをちふ也

因三名乃すくきれす

真蘇方にすくなきをたうれやうに
あるきをいふ
十寸穂のもとに 一天ゆなり也
吉麻穂乃もとき 法は紙をとらふなり
源後朝の所に

花すくにまそほのいとにくりうなる
あしきも人とおりかゆるうな

此すくなのすほしく草にもたゝ巻乃五十三段に
人おまさるをうゆにくはるものまきをかのすくにまうう
ほのもときなんといふ事ありもとにしへのしりしまとを
ほとへきりあるりとかたりをうと光蓮法師もたゝに侍り

なるべきにて爲れなりをうにこのうさやあるかしらへかの
すきの事なるひにはこれへのおしつれがうそうは爲う
らんやいひなるとあまりにものさらし爲なるそこう
かしへのいひなれど無下の事とも作られるものかな人の
命は爲れ晴(それま)るとまつものかはまれり死にむしつともうせな
ばあつまきてんやとてもしかしかあなつてなしひ給り
にをりとやつらへあるこうゆしくあかこうおほ給ま
敏(とき)ときは則(すなわちこう)功をとそ論(かんご)語とらあるにも作るなれば薄(すき)
とらぶしくしひをるやうに一たる周縁をぞしふへうりをる

(九) かうを取に半ゑまつさのまま

むかし敏達天皇の御時にうまうしようもかうまの服は
ものをうれにあまたしきり日本すてよむ人なかりけるに
王辰爾といへる人その服を飯ぬくうへにかくむしてしろな
緒にをしてうへなれどきぬにみなうはりてよくよめたり
きり服物のことは
家意にかたすれはうくしやの葉れ
うつくぬほとにしろ人も形し
まへの古事をふまへ家意のんをよみあらなり
(宇)よふこゝるの事
古今集言の部によりて人しれとしてて

をちこれ此ぬつ事もしらぬ己中より
おほつかくもよふこゝるうか
此家大は秘統の事とかん是より言のとれにして既にも
おしよむには先例を用ひ又は言葉れ緒にしたれくよみんな
なりいかゝるといふすは御文なくてしらまぬるになんを
ぬくよふこゝるいかおふせるもしちとりと古今のこゝると
て御文のすゝしたるに様子基佐ん敏信部にあひて大家
にゆき夜話の双紙一非にそのけはよしつとるをさゝぬく
のゝるにおよしかしあり家にもあて
よし人しらぬ

そらこちれ[illegible]ぬ山中より
おれつかくもよふこゝ[illegible]れ　先ハ猿なり
後恵
[illegible]ひ給ふ山れよふことより
おろ乃くこれ[illegible]ゆし[illegible]　山[illegible]なり
黄之
はゐる[illegible]のこゝりあるてふ世乃中より
[illegible]れよふこゝ[illegible]てなるらん　山[illegible]
文内[illegible]
いろうすくちりけし花のこゝ[illegible]ふ来[illegible]

[illegible]れよ[illegible]ことりあさかくなく　うくひさ
後成
来る人もなかりけ閑のよふことより
[illegible]　郭[illegible]
[illegible]れとも[illegible]のとれとん[illegible]へ来し
[illegible]林[illegible]等の年[illegible]
[illegible]
肥後
詞花集
来ぬ人をまちうけ山れよふことより
おなしこゝろにあらんとうさく
千載集
匡房

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

おもしろきちえもやまちがしたるしたり
しれたのもりまんうたふなくなり
金葉集　前斎宮尾張
糸麻山ふれ人もなりしたれ
こゝろはそくもよしてもうかな
玉葉集　家隆
あたらしきれあそれをしらやよぬことり
月ともかゝのまゝ乃そう
堀河百首　仲実
あたへすう人なりしたふまんよしかしたり
しとりはしやまちをすくしん
同　基俊
おほつかぬれよしてやりなくなしん
こゝぬう人も聞きこ山中うし
これしたかまのもれかしてよみなり武人のいくく後とよ
ぬこるといふは此獣(けだもの)のまゝれよりとりしたのをなろ
うしめり又楯(こずゑ)をもうつくるのやうにまゝれは此名あり
やかんとうく実事は侍(でんし)文なりしてはしたれまりしきしこゝ
つまふはしたすへなまゝは侍しさうなり
(十二)うはかりれす　蝙蝠

俗にかしらふりといふ鼠のもぜしがなるといへりされハ鼠
似くもまゝはゝらぞ又獣にして獣にあらびとしをのことにぞ
にもまゝかき里にくかしぬり王をすゝとゆらんいへりされ
処のあるまゝかりふるき命に
もまゝなくむしもかゝらん始にくハ
このかたゝりあるしかしゆし
也偽るなり来かとにとゆるもかのるかとちがひ侍るさ
まふとゆるゆへ人のありくをして人をまゝてさゝ侍さう
行とおもへ都となん

志のくまぶ巻下

㊀神無月の事

十月と神無月といふ事あまた説のあるを先一説りハ
正月よりハかぞへ来て十ふく清くる数乃きハまいを最月よ
りハまた十一ともどる侍るにより上無月と神と上と同訓
なれハ之といふ説をまた正月と陽月とも名ばくるハ陽かきを
うたがふと尓雅かとまもを十一月ハそじあて一陽来復すゝゆ
毎に十月ハ極陰の月とされとも陽月といふ陽の絶無なりす
ぶきを理なり陽神のなきといふ義まて神無月と名付る
うせ云説をて又伊弉冊その崩じ給ふ月かまハ申之と云説

もとは又四方の本業ちりすくろ法なれど業皆月とする者
すゝ説もあれ此説はおぼつかしく又いつの法よりいへるまや此月
諸神おもゝ国大社へまいり給ふゆへ志ろいふとなんむかしも
伊勢へ諸神のまいり給ふといひしまや法也くまゝ十月を
神無月といひて神事ふそぐかろへきよしはしるしあるもの
なし本文も見えて但当月諸社の祭なきなれば此名あるゝ
此月よろ川の神たちも神宮へあつまり給ふなんどいふ説
あれども此説なしさる事なれば伊勢にはこれ祭月也
もへきに其例もなし十月諸社の行幸を例もおほし但お
ほくは不吉の例なり 下巻六十六段にあり 兼好の法は伊勢へとこそ申侍り

なるん今は伊勢への御姑なしはおもへものをせいふしき
事之神無月といへる綱は古所に多くあれはなき事まてはい
ふまゝしき事なれば兼好の志ろしめ事ハ此段不
審なりと貞徳老人申されしとは法也くに諸社の行幸
を例多しとかゝしは拾芥云松尾 寛和元年十月十四日
花山院北野 寛弘元年十月廿一日 一條院日吉 延久三年十月廿九日
後三條院是ホの御門行幸なりしと見えたり不吉此例と
かゝしは花山院は在位二年にてありぬさせ給ひ御落餞
あり後三条院は此行幸のあらせしすへらせ給ひ又のうし
崩御なりしかやうの事を不吉此例といふまやあらん

又諸神お雲へまいり給ふと云説ハ貞治の頃後沢山の妻門
也阿といひし僧百葉集の説をして朝林乗葉抄と名付き
第六に云天下の神無月とお雲國にハ神在月とも申し我朝
の諸神まいりあつまり給ふ故也その神在月のうらくにて
神くく来臨の時小童の法くまゐることくなる笹身波乃うへに
うゝ事数もしらを諸神ハ彼浦の神在の間しろにあつま
り給ひて大社へまいり給ハ此神在の社不老山といふ所に
あら給ふ神号佐大明神也もなり是則偽葵の神あてま
します大社とハ杵舂明神とも別當とハ國曹とも大社
ハ素盞嗚尊ゆへておとします月本の諸神ハ天照太神とこそ

宗廟の神なれども尊敬をへきに何とて此大社を諸祖神
としてまゐりあらの給ふといふ物しんきそれハ子細源秘之ことゝ

㊁松浦佐用姫ノ事

此よ姫ハ大伴の狭手彦といへるものゝ妻なり欽明帝の此
時勅使として呉国へまゐる時此よ姫めまゐれを打しこ山に
のぼり来れとゆるまてハりを持たもと我ふりてまゐき
かなしとをりそれよりその山を此ゆる山といへり此ハ
衣乃ふしとゝ領令と書なり百姓ハ
ら我門へまつらしいめはまこ山
ひ是ゆりしよりおへ私山乃名

やあるハ洲古事とよめれ命をかへるハ生のなれんを又質
乃字と申と此ハおふさうんと名にしれたるはふ坂山のさ○うつ
ら人にしらしてくれよしをうかとよめはうたかどハ質のなを
あふ坂のあふといふ詞を人にあふによせて名に質なしばさ
詠うつられことく人にしらしてくるよしもあるしや
なりさねうつらハ砂地にはさくさふてくりよせれにいつれに
見くるとしらしぬものなりくるといふもうづらの縁(ゑん)なり
うつらのくれを人のくはによせ云
いへれなり

百葉より

(三) 暁のあきれはかきの事

鴫(しぎ)の羽うちと榻(えぢ)のうしかきといふ事 絶なり事は

あらつまの鴫のうちはうちとく羽かな

君らこぬ夜を亂そかとうく

又

いろつきの榻のうしうちとく夜うき

君らこぬ夜を我うちのかく

夜着とりかへ方に夜来まり鴫といふ事はあらつきにしぶぐく

羽をうくものなる程にそれをとらひにくるしくていふ程

まぬうしなぞしへ君らこぬ夜は我そうすかくとよめり又榻

とは床くと註してうらいぬる床のるなりある人女をこひて

九十九夜かよひ事死をうとは女かなしくこひてよめるとな

ひ先はそのうしろ百夜かよへと女のひろろ程に男かよふ月ら

ぞ我榻は一夜二夜と半分く九十九夜までハかなしなりぶ

死なるほとに君らこぬ夜は我そかとうくに儒なるとなる

ぬるまにしうしあるといつ乃此よりやひかしなん深(ふかくさ)なれ

かねといふ人小町がりしへかよひしまなんとりも不思議

にうるなり又小町ろ夜ごひの方とてことうりや日れりと

なれとてりもしけしいへれとも集に入てすとぞ

(四) 蟻通(ありどとし)の明神社事

むかし老ある親（がや）と聖山にすつる事ありけるものあるにおやに老ひ
なるものをておやとかくしむて居しなむるあるに時いこ
より七国がりまかるものあるに法とかけしてゐるとてもこ
しをうづこれとかけるものかうりなり彼親に老なるも
のむかうに此事を親にかたりをれど老人のひいきれを
いかゞ国是ハ日本の人はんとむさしんあめがへし思案（しれん）を
蟻とかしへるまくしに糸をつけ穴へ入又むかふのあるの方
に蜜（みつ）とぬりて置へしかうしハ蟻ゑの乃気にしたひてむかふ
へかゝるしといふ事のむとかりよせてとしへれこゝくしたすれ
をいひしにあがたす蟻むかふ此穴へかゝるりけて糸とは

らぬきりしのもとへ置けるしをれハ人々不審していふ
うゝか別したるをと問ふ行ましたくれやうとかたりを
まづさてハ老人をかゝてゐるものなりとてそれより老た
か親とをはる事やうゐりやうとしすかたら彼老人
と仲にいたへとて蟻通の明神とをり此社ハ和泉の
にをいつの比といふ事ハしきひ清少納言が花菓ありし
かゝすれ明神乃ゆ

七ましたまはるまれ玉の法とぬきてあ
ありけれしかをとしたや

集にハありけれしとハしらしやうくんとなりけしてへらまさ

里七ことハ七曲と半なり雨ふりたれ玉と

(五)義原義孝の事

よしあらハ謙徳公の三男母ハ中務の代明親王女右少ね従五位下春宮亮にくみこし兄を奉賢とて前の少ねといひし

なりよりてよしあらを後の少ねとそ号しすり栄花物語

竜山巻にいとくはの少ねハおとかくよりいとしくあんたれ

して法美種といみしくよくなりて法師まやなり和

ましとのこおほさおくこ作者紀頼に天延二年九月十六

月ニ卒スこと法輔紀茅にこ亡者の命とて義孝少ね

志かもかりちきましりの代まとり門

うへ紀郎とあはつそう祖しやハ

是ハ死去をしもしくとかくかせそかつひろうを志きを

紀を妹女の事にあらすとて後拾遺にハ母の事とも

又

志くれあはれ乃紀そちり雨ふ

なふぬかさせれ他ぬらすしじ

昔契遊兼宮裏月ニ今遊極楽界中風ニ

賀縁河周梨とひし人の事にかくあくらすとなりあ代

くしくハ大流にあ

(六)大江匡房れ事

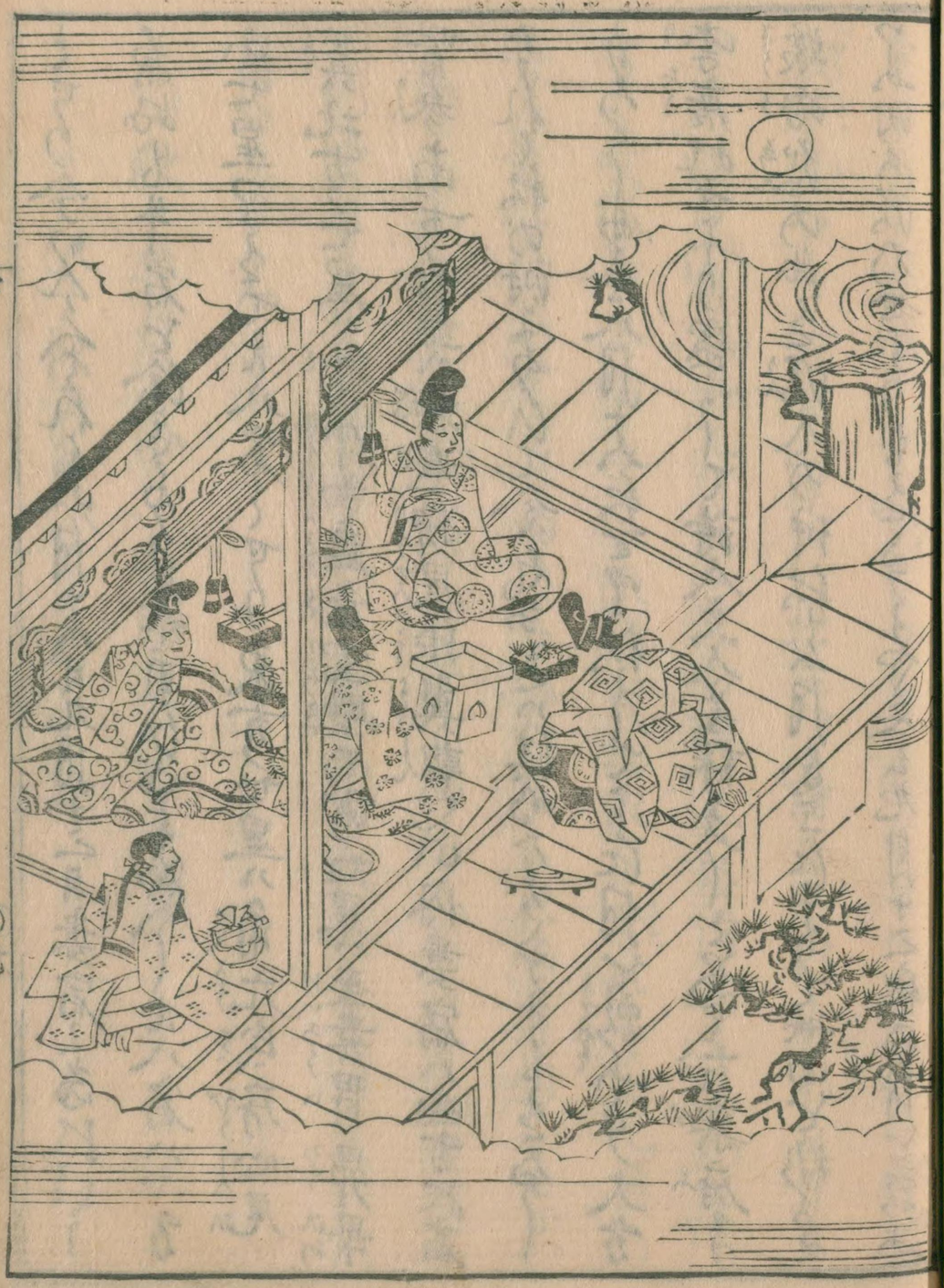
国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

はさふさつゝ江帥と云大江氏にて大宰権帥にてありし由
匡房なり和漢の文人にて江次第江談等の作者也此人を
うつしたるは此也条大納言公任卿と同車して宇治の関白殿
通ひへまいりしときよその比北野通云平等院を建立して惣
門の役宜と称ひ給ひ給ふ時よりて云経つて終り給
むくらハ平等院の塔建立を河南ハ山西ハうしろ也ありよりお
に惣門を立へきたよりなし小に惣門のこちらに立と云つて
さひ守ふかさしも和漢の文人也し公経つて先皆かくりを
つゝ匡房に申ひ給ひしに菩ていく先哲を勤めて八六波羅
寺也上人の寺院ゑまそハ西明寺紫衛門の師の天竺ゑそ

ハ大般若経ろ戒律論師のちとやさんありけるよりて迄
時の人さとそうりあしとみな感しあつとかん八雲御
抄に云通俊匡房ハ賢臣とそありひて終りまれと有けるハ
同月の海にありし匡房ハ由さく出かりとし　匡房

高砂の尾上の桜さきにけり
外山のかすみたゝすもあらなん

此哥後拾遺集に入しもの也かハりちかさみの家まて入
さけぬべくありし給ふ遂に山の桜をのぞむと云
るをよみてこしと此哥を郷信朝臣していくあしつまづて
とかくやゝ此哥なりとて定家の八百人一首にえらひ入給



為りえ達もんくにこう

㊆名月の事

八月十五夜九月十三夜を名月とて雅もりてあるひなから行なるゆへともんをはまさりしに兼好法師発ぬしてはきくまはいくく 下巻百四段 八月十五月九月十三月ハ婁宿なりし宿法明なる夜は月をりてあそふ良夜とひ〻〻婁宿とハ二十八宿の一つなり正月一日より十二月晦日まで廿八宿と一星つ毎月にあてくその月の宿とひ逆代りろこしより来る暦にハ廿八宿を次第して日数に配を目なにハ古紙云のお絵なりとて別に前はしえる事ゑ中法大門回禄をう月半宿ことて牛と除て廿七宿

とせり今かんがへられは八月十六日九月十三日婁宿に当れ候し
兼好も牛宿を除きたる事を用ひたる如へし廿八宿ハ四方
に七星つゝきて廿八宿とせり東方ノ七星ハ角亢氐房心尾
箕ハ北方ノ七星ハ斗牛女虚危室壁西方ノ七星ハ奎婁胃昴畢
觜参南方ノ七星ハ井鬼柳星張翼軫也内婁宿ハ西方の宿
なれは秋の時にあひて金気なれは清明なるまさもあるべし
もろこしにて八月十六夜を中秋としてことに月を賞する大方
李唐の世より盛にして詩人文人ゟ詠多しとぞ古楽府ゟ
嫦娥態の曲を深人の仲秋ゟ月なきによりて此曲を作ると
いふ時は深乃世よりもあるまゝや又云九月十三夜の月を賞ふ

事もろこしにはさしてあとゝもにもまきなり日本にては菅相
慈宰府にて九月十三夜の月を賞る詩をこゝろにしりあるまゝに
や法性寺入道相國九月十三夜の詩を云題詩集にも乃せたり
前も三代集にはいまだ見えたる源氏物語夕旁の事に九月乃
法夕旁の大和小野より帰りたるに十三夜の月のことなるや
うにさしおかれたる金の山もあるとあるにしかしまるにあり
その法にまとの夜の月を賞しかへしに載集に九月十三夜の
月をよめるなり

秋ゆゑ月ちてにこゝろ作て紀来事

こよひ一夜にあへるもあるかな

㊇さぞちやうれる

三毬打。三毬杖。爆竹。尤義長如此あまた書やうる也三毬打と
申ふれはむかしは毬打三門とあてて作りまいまの爆竹の竹三本を
足に用ゐるもの形と云服昭袖中抄十二云十節録ニ黄帝取蚩
尤頭毬之今毬杖是也以彼例漢土年始用件事國中無凶
事仍日本國学其例年始打毬杖然則毬杖玉尅春ト云
事文類聚爆竹神異經西方深山中有人長尺餘犯人則病
寒熱名曰山臊人以竹著火中燀爀有声而山臊驚憚
歳時記爆竹燃草起於庭燎これ目なのことまさに似られ
たるがらへく剤と作るなるれど或抄ニ云爆竹ハ除夜ト元日と

にするまきこと元にあらひ上元には涙の武帝の太乙とあふるに
昏時より夜のあくにまでおとなふを事のくしめとして燃灯の
事を又天竺にも正月十五日僧法あつまりて燒をとりし佛令
利をとるなるあり爆竹の事なし日本のさぞちやうは俗なるに
いひ傳るは涙の時帝の時にしめて天竺より佛法をうる又嶽の
道士ことをなふらんと訴なふにありてそのしるしをうんとて紅
經を尤に無道士の書を尤に無て火をくれに道士の去燒
失をされは尤の義長せりとうくた義長と云西域義長や東
ちやうやを西域紅法の義波さりて東ちへ流布するといふ事
なりとことはまゝ書云 下巻四十四段 さぞちやうは正月にうちたる

さちやうを真言院より神泉苑へおして続おくる迄法成就
の池といふとあるやらん神泉苑の池といふなるに法成就の池
といふとそや其故大方ハ元の名なりといへども惣ハ神泉
苑の池の名なりと志らせるり真言院の修法十四日の給
ひまゐ後より毬打せしまや今十五日ふられせとらやを御られ候ひし
禁中より八十八月ゟ之を神泉苑のさらもやうよりねよ又別ニ
内裏より奉らしめて御へし真言院ハ拾芥云在八省北ニ僧綱人
候勤ス御修法念誦等ヲ也ハむかし大内裏ハ時の事ニ今ハ
紫宸殿ふくされせるかられ神泉苑拾芥云天子遊覧
所以近衛次将ヲ為別当ト乾臨閣謂之正殿ニ金閣畳石アリ
二條ノ南大宮西八町三條壬生東善女龍王常見此所ニ

㊈初瀬に恋をよめる事

続よしそのかくりに初瀬に恋をよめりし事まことにおほく
して歌によみ連歌誹諧にも初瀬とよめるとあまたの恋よ
見えたり新勅撰集恋二に権中納言俊忠家の恋の十首の
歌読侍る時祈不逢恋といへる心を　源俊頼
うかりける人をはつせの山おろしよ
はげしかれとハいのらぬものを
又新古今集恋の部に　定家
としも経ぬいのるちぎりははつせ山

尾上給ふ○のようの所ふくれ
給ふし物語の題ハむかし中納言ありて左衛門督かけあるへ
れのうち二人ありて一人ハ時の院の御ひとめあるに此ふら
ま姫君一人出来給ふ事ありて今一人のおのうちハ時めく諸大夫
のむすめにあらはしかるに姫君二人いてきたり彼文ハいや
うせ給へやうし給ふまてすれうちの姫文を中納言いとかし
つき給ふて外のむすめ君と一所ようひ入給ふ對ますまし
めなふいつきも屋人ことなく生き給ふ時の関白殿の御さんなら
ま女物殿ときあくけうらありをもと彼あ○君乃まをは
のうに守なひことなき点にあくうも中ありをとものこてお

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

つきちはふぬきり姫君ハあはれとハかけしまくら人のにほひ
はかなさとたそれはかくうちとまりひとよ御母君さはひ
らう彼中上とてひくさ給くさひハおもしろひて中納言ハや
むらとれきはまかれて給とそとうしかくこの姫にあらん
御〆中の姫ハ兵部卿なりける人の妻とありけるハこの姫
といふ人へおもとかりにさしのれ給ふに東とうてひさ給く
てうり前との姫に添うさせてかの君にあてさせけりかの女
たらぬ系なれてこの姫とそれとかけてむつましく思ひ
なれはかのる御祖乃対に座とかさ琴の音めしくるを
この姫にあれなりらんと内侍へとわたりハ気をしのくらう

お孫君とけんあられとこそへはかの中納言ものさそてハたえらう
まゆりしとやもうし次ハかわりしられともこの姫とともむつましく
なりまた人てせんさうおかく中上をそうして中納言に中納言ハ
おねむかとも〆宮の遊言みえていうかわらしても天下へもや
はし人をさせんへとおはけしそうと給て母姫く孫さそのひあさ
まくし誂しかくねこのくあの対よかようり成つきも給へ大
中納言殿後ふとくもかはけしめはくつけるとて下女とうとうし
あくさはきかかる法師のハかくひとくれめてゆかりしとそうせ
あ人て中納言ハかとろまさくてうちすしハうか御かとて
そのはやしてつ内大臣なりし人のむすめハ嫁しめ給ふ所は思へめ

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34

ガラス使用

始へはまく無いとくはらしく又下女とはらしむくはらに
大内の役かけさる七十まをとらふいふせきけふしむまぬすしとら
をんとはりぬ出るをんさしあるを女をくはふさに姫君には
それはうきまにかりひおふく程よりしに世をのがれてすめる
尼乃古文のゆかりなる姫よりひのかせくとりなむ夜まにさ
されて程よりしにかくれ行おふ中納言あるかとろきけるに始へ大
行方しまひかれ女は三位の中ぬまなり始ふ程むかのる
ゆしくおほしめして初瀬に一七日こもりて姫の行恵成
しらしめまへと行里始ひをうにまんもう夜乃夢にむかまり
てうむきをしおふ中ぬ女にまりして面をえ始ふまありし

西の對の姫之さて三位らんせし始ひかれを姫君中ぬ女の
袖とむかへ事

まさ河海のうことに意しひまひぬまを
すみよしをとそあさはいむかれ

かく殊し始ふとえく夢はめぬに現なりとうろひた
まひてそれより夢のつゝをえてすくに程よりしにまいりぬと
て御供の人をかしし始ひ御供（まいん）一人を具して程よりしに
いたり始ふまうれちらえにあつてもりあひしやうへうへら
かひいりせ此中あさらしひ家とはうへ始ふとう

十三月三日宗の餅乃事

むかしはたゞ事あつかはしかりと今はあまり稀くより紀にて
すゝとそたきこゝは
六日の夜まいもちゐはくはしもろゝはし
きけはよしと乃はたゞこはむなり
然るにはむしろ夜せのうんして母のつゝりあるをまて男のよ
見るなりたゞこは淀(よど)は多くまゝゆへはあまり淀(よどの)を
夜(よどの)によせたゞこつむと母(なぐ)にはむといひうをたり摘(つむ)とつゝる
によせたり
(十)きくのきせまたの事
九月九日に菊のいまたむらぬやしまはたまてきく此花
のかたら夜はくり枝に法をてもくあそふといふ一説に菊
乃咲たるに露をあてまじきたるに綿をきするといふはあし
お祝之塩河院の百首に九月九日のうたり
かさしあてきく乃きせまたをふられて
またれさうり此花さかりにより
とゝ此あまりてふゆへきこすへくうやうのかりひちうむ多し
うは菊と云も菜和(ぜうは)のみなと黄菊(きく)とぬしまひしゆへに黄菊と
書てうは菊とよ定といへる説ゝ先も紙なり菜和菊と云
あうは菊とは續なれ又そぐ菊とは向背菊(うぐ)とかくこおも
てのそむきあるといふ也鴨長明四季物語にもそぐひにたく

おうぶ菊と半ゐり是は多く菊の咲えされてちりひあひ
ゐりと云そぶはすりちぶひゐり事といへり又九月十日はさく
とそう菊とも云九日は菊を用ゆるは十日なるゆへ十日乃
おう菊とそう菊といふ是もそむきゐる義也

(十二)宇治の橋姫乃事

古きうたり

さむしろにころもうゐし夜こよひもや
まれとまつらんうち給ひし心也

此家を経よし四神宇治の社にひろのりとにかよひ給ひ
よみあふといふる成菓派に津くまり此家より清くりしと

みゐりし所は宇治の里に経行りける女にうよひゐる人
乃ようにうちる家なり又或説に宇治の意なり経る女に
祭りをる人あるその女懐姫(くはいひん)して津そりに七浦のまうめ
とくひゐきとこのこゆるかとに男めをみに訪くさ給ひ
事起して幽呉(ゆうれい)のうみゐる所なりとかいへり皆志りこさ
給ひ之宇治なしねとも橋のもとにある神を橋姫とい
ゐはたしのちりの名神といひく家なりそれを橋姫
といふ陰神なれは姫といふなり

(十三)産屋(うぶや)の七夜にうゐいとふ事

其は女清姫文家どの清産の七夜に甲斐国世(なかひと)産の里より

源後れの事也又清産乃時りしあかとてこれ事あれは
家れむ○よりこしれとまろりかとしのこ清きく家
あも書ありさせる事統ハかしかさぬよりかとりとる
よしとりも是もあかハあうしきあくせられハ家あかとし
とのんかる人しと貞徳老人のろ爲せしれとり皇女
誕生ハ南のむ○よりたとし皇女乃誕生ハかよりかとし
とし平家物語りしなる誕生にかへたしありされしそ
きこれあかしあしとりされたれしとれすかそ人中をとると
(市)後鳥羽院の御所所事
此帝ハ屋人ことなきを人をてとしてせ給ふ文象三位後成

卿家の法師能(ハン)なりしなりの人なり勅して　通具有家定家
新古今集を撰せしめられし　臣下にハ後成卿をもてしめ
侍家相及定家家隆雅經有家通光具親法師なりハ
慈家西行寂蓮長明女にハ式子内親王後成卿女二東院領
波宮内卿此下にハ祝部成仲右衛門秀能かとりてなし
後鳥羽院自撰(ニヘ)此御哥
はちとさくと紙山鳥此きてり尾乃
なりかくし月もあらぬいろうれ
家ハ神なりものをハ此ハはうか紙く
うかうと秋まれなりひかる様と

れりひかれ打ちかくきれ此夕をふり
むせふもうけしますまきしきみに
なれ人まれうぬきのやきやきほうしん
ゆふ神の夜なりみちハ見て様せ
見れまくふ山ゆ分あらくきくかめり
きやこもいさや秋さむかるしん
まうきまきまれ此下なるにもかきくれ
ぬれとも神のいろに出ぬれや
神の家もあらぬきまうまてこう人ろ
うつまとこうれ歌せしまうふ

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

おほおらにちきうちひのかしりへぬ
月日もうをよゆくすゑのそら
なりあるや神詠の山り雲さしあ
ゆふ風乃そらにいてむ月うを
こつりれやうり代のうしめ契をかし
そのおこれ此神やうきくむ

(国)徽書記奇れ事

徽書記ハ冷泉家の為尹の門人かくれ家の達人なり
しゝ昌山十二月和歌り
中くまこゝぬりあらしれ事もぬし

きりれ紫れしせ秋まれ三日月
かこうみしハ紙に面白き歌之とあらしに聖人の代にハ鳳
凰来りて梧桐に掛ひしうあるは聖人もなりれハ鳳
凰も来るましきれハ梧乃来てせん紙の三日月ハ
そくあらんしくこと紙梧の紫れさくりとなれんかこせと
ひふんこゝぬとあらし乃事とハ鳳凰の事なりしに歌代をあ
さむくとうにてあるされなり世紙にて七月魂祭の事に
中くまうなさまなしハぬるはせに
かつらんとの紙をハ乃ゆゑく後
せうみしとこ紙に出してあくれにおほしをうるやめし

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

858
34

こゝへされなりとなりあのんは中くにはかまうなくいつかと
同し今自はなきたまひしまつる目なれとなかもなりとかう
小男なしてあしはをふのまつりは魂のぬるゆはかつしん
そのをなきなりはきんのれたまをうへるまあしてんなこ
とよやうらなりとさこゐるなきしてしまうしてれんまとせし
あくれにこうはるめき

宝永五戊子年正月吉祥日

永田綱兵衛
梅村市良兵衛 慈板

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『しのゝ葉草 3巻』 請求記号 858-34

ガラス使用